

ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2026

みなづき かぜまちづき あおいづき
6月(水無月・風待月・葵月)

＊二十四節気＊

ぼうしゅ
芒種 5日

稲や麦など穂の出る植物の種を蒔く頃です。稲の穂
先にある針のような突起を芒^{のぎ}といいます。

げし
夏至 21日

一年で最も日が長く、夜が短い日です。これから夏の
盛りへと、暑さが日に日に増していきます。

図書委員よりおすすめの本

書名:『コンビニ人間』 著者名:村田紗耶香 出版社:文藝春秋

この作品は、芥川賞を受賞し、多くの国で翻訳され、世界的に高く評価されています。もう読んだことのある人もいると思います。

世間の常識と考えが合わない主人公は、コンビニ店員としてマニュアルに従うことで「普通」の自分を演じています。しかし、マイノリティである主人公には理解できない「普通」が次々と押し寄せてきて、周囲との歯車が噛み合わなくなってきました。「普通」が恐ろしく感じるほどです。主人公の社会の常識に対する、冷徹かつ合理的な視点が本書に独特な雰囲気を与えています。

私がこの本の好きな点は、なんてことのない日常と、そこに潜む異変の積み重ねの描写です。少しずつ主人公の思考に触れていくことで、まるで自分が主人公になったかのような気分になり、「普通」が理解できない主人公に共感できる部分もありました。この物語の結末はあなたにとって、ハッピーエンドとなるのでしょうか、バッドエンドとなるのでしょうか。

この本を読んだらいつもの自分とは違う視点で世界を見ることができると思います。本自体はコンパクトにまとめられて、読書に慣れていない人でも手に取りやすいのでぜひ読んでみてください。

(3年 図書委員)

6月新着図書リスト (6月中旬に順次図書館に入ります)

NO	著者	書名	出版社	NDC
1	西岡竜誠	「読む力」と「地頭力」がいっしょに身につく東大読書	新潮社	019.12
2	堀田 秀吾	科学的に証明されたすごい習慣大百科	SBクリエイティブ	141.75
3	結城 浩	数学ガール	SBクリエイティブ	410
4	D・サダヴァ 石崎 泰樹 訳	アメリカ版 新・大学生物学の教科書	講談社	460
5	河田昌子	お菓子「こつ」の科学—お菓子作りの「なぜ?」に答える (新版)	柴田書店	588.3
6	石川 伸一	しくみを知ればもっと楽しめる! 調理の科学 おいしさの教科書	ナツメ社	596
7	ちいさな美術館の学芸員	学芸員しか知らない 美術館が楽しくなる話	産業編集センター	706.9
8	逢坂冬馬	ブレイクショットの軌跡	早川書房	913.6
9	伊与原新	コズミック・ガール 宙わたる教室	文藝春秋	913.6

10	雨井湖音	僕たちの青春はちょっとだけ特別	東京創元社	913.6
11	小西マサテル	名探偵にさよならを	宝島社	913.6
12	相沢 沙呼	invert II 覗き窓の死角	講談社	913.6
13	土屋うさぎ	謎の香りはパン屋から 2	宝島社	913.6
14	嶋津輝	カフェーの帰り道	東京創元社	913.6
15	藤ノ木 優	スウィッシュ!	徳間書店	913.6
16	早志百合子	平和のうぶごえ:「原爆の子」として生きた80年	毎日新聞出版	916
17	クリスティーナ・スーン トーンヴァット	闇に願いを	静山社	933.7
18	ペネロピ・ライヴリー 斎藤倫子 訳	ノアハム・ガーデンズの家	ゴブリン書房	933.7

☆【スウィッシュ!/ 平和のうぶごえ:「原爆の子」として生きた80年 / ノアハム・ガーデンズの家】の3冊は今年度高等学校の部の課題図書となっています。

今月は、佐伯 康英 先生(地歴・公民)です。

先生方よりおすすめの本

書名『いつかの涙を光に変えて ―統合失調症の兄とトイピアノ―』

著者名: 畑 奉枝 発行所: サンパティックカフェ

青が基調の表紙。涙が光に変わっていくような予感。帯には「大人のための 新感覚絵本!」とある。プロローグに「心の中の光を見失い/暗闇に 囚われてしまったとき/人は かすかな光を求め/彷徨い歩くことでしょ」以下、4連の詩。このページも青。作者・畑奉枝さんが見失い、追い求めた光。積み重なる彼女の物語を、西条市の画家・半田正子さんの絵がやわらかくアシストする。

兄が精神病を患った。理由も分からず自分を攻撃してくる兄。「精神分裂症」という病名(当時)を告げられた両親の衝撃。誰にも言わない、言えない、家族の秘密。100年以上前に東京帝大で精神病研究の第一人者であった呉秀三が言った「わが邦十何万の精神病者は実にこの病を受けたるの不幸の他に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものというべし」という言葉を、私は精神病患者家族会の方から学んだ。秘密にせざるを得ない不幸。ずっと後になって、兄が問題を起こし緊急保護、入院となったとき、家族は「どこかに相談すればよかったのでは?」などの声をかけられた。これもよくあるマイクロアグレッションであり、世間の目、偏見にさらされることの恐怖があるが故に、どこにも相談できない。社会の意識が変わらなければ、当事者たちがずっと忍従を強いられていくという構図がある。

壊れていく家族。日々の心身の痛み。家族に訴えることも、友人に語ることもできない。高校時代、家にも学校にも居場所がない。彷徨する彼女の支えとなったのが、幼い頃、兄の後を追うように習い始めたピアノだった。

東京の音大へ進学。仕事もピアノを生かして。でも、埋まらないままの実家との距離。兄の病気をめぐる母との確執。やがて母が他界し、共に過ごした日々や母の胸の内に思いを致す詩が綴られる。温かく懐かしいタッチの絵は彼女の心の変化を感じさせる。そんな時に会ったトイピアノ。本物の音楽はどこに宿っているのか教えられた、と彼女は言う。避け続けてきた故郷・愛媛でも公演。実家の二階からふらりと降りてきた兄に、自分の相棒のトイピアノたちを紹介したところで奇跡が起きる。統合失調症の兄との時間が再び動き出す・・・。

小学校6年生の時に転校してきた畑さんとクラスメイトになった。その頃は知る由もなかったが、すでに物語は始まっていた。あれから半世紀経ち、彼女は自分の体験を語りながら、音楽活動のバリエーションも広げている。トイピアノと兄に教えられたことを、演奏とともに語る。多くの人が共感するキーワードは、「不完全なもの」。機会があれば訪れてみましょう。埼玉が拠点だが、毎年のように愛媛でも公演を行っている。

呉の言う「この邦に生まれたるの苦しみ」は解消されているのか。精神障がいには偏見を持つ人が多いと思えるだけに、私たちの人権教育・啓発の成果が試される分野だと思う。高校の保健体育の教科書に掲載されるようになったり、NHKのテレビドラマが放映されたりと、理解増進に資する取組も多くなってきた。この本も、昨今の少数者排除の波に抗って、障がいのある当事者や家族に寄り添い、読む人の魂を磨く一冊になるだろうと期待する。

御協力いただき、本当にありがとうございました。みなさんもぜひ読んでみてください!